

スーダンを訪ねて

小村幸二郎(鉱床部)

Kohjiro KOMURA

印度洋を飛ぶ

世界の耳目を集める印度洋は 深い深い闇の中である。南西諸島上空にさしかかっから2時間余り どうしようもないほど大揺れに揺れたことが白昼夢であったとしか思えないほど エンジンの音だけが単調に伝わってくる静かな夜間飛行である。昼間であれば きっと マルダイ諸島も手にとるように見えるだろうし 中央印度洋海嶺に想を馳せてもいたであろう。スリランカの首都コロomboを出発してから3時間半 セイシェルズ諸島の中で最大の島であるマヘ島の空港に到着した。成田空港を出発してから既に15時間半が過ぎていた。地上の気温は27°Cである。

「忘れられたパラダイス」とも「インド洋のエデンの園」とも呼ばれるセイシェルズは 南緯4°付近に位置し 1976年に独立した美しい島国である。87の島と無数の岩礁とからなるこの新しい国は いろいろの意味で興味を魅く。87の島のうち38は花崗岩で形成され 残りの島は珊瑚礁であること 年間を通じて気温が24~30°Cで 台風の影響を受けることもなく 伝染病もなければ兇暴性や毒性をもつた生物も見当らず 島民が温和で食物が美味しいなど それこそ 数え挙げたらきりが無いということだから やはり パラダイスかもしれない。ルイ14世の財務長官であったモロー・ド・セシエール子爵の名に因んで セイシェルズと名付けられたこの国にはじめて上陸したのは 1742年 フランスのラザール・ピコールであるといわれているが 既にそれ以前に 印度洋を稼ぎ場とする海賊が この島々を隠れ家としていた形跡がある。そうした海賊の中で最も有名なのは 18世紀初頭 ポルトガル船を襲撃したフランス人

の海賊ラ・ブーズである。斬首台に向うラ・ブーズはその時に強奪した時価800億円以上の財宝をヘマ島北端部に隠したと伝えられ その財宝を探し求める人は 今も後を絶たないといわれている。「パラダイス」「桃源境」にまつわるロマンと伝説は いつの世も尽きない。

こじんまりとした空港建物の片隅には 土産物店が並んでいる。建物全体の規模からみれば 売場面積の占める割合は相当なものだ。近年 風光明媚な避寒地として特にヨーロッパからの観光客が激増し クリスマス頃から2月までは ヨーロッパ~セイシェルズ間の飛行機は満席だということだから 売店もそれなりの規模と品数が必要なのだろう。

セイシェルズの特産物にココ・デ・メールと呼ばれる双子椰子がある。主としてプララン島に生育するこの椰子は 世界中でもここにしかないという珍品で 人間の身体のある部分に似ており 土産物として珍重されているらしい。しかし 空港売店では 売り切れていたのか 実物は見つからなかった。

セイシェルズからケニアの首都ナイロビまでは アメリカからの観光客で 満席になった。隣の席に 相当に太目の婦人が乗り込んできた。偉大な臀部も 何とか納ったらしい。「空の女王」と呼ばれるリアジェット VC10も 優美な姿で飛ぶのは容易ではなさそうである。

飛び発って間もなく 饒舌家らしいその婦人は むき出しの太腕をさすりながら 話しかけた

「どこから乗ったの?」「東京から」

「セイシェルズまで何時間?」「15時間」

「Oh, terrible」

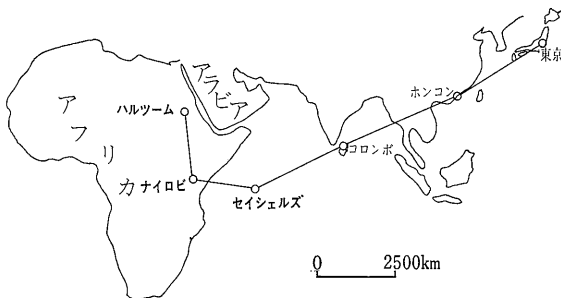
「セイシェルズには長い間?」「1ヵ月」

「テレビやラジオは?」「全く 新聞も見ませんでしたよ」

「Oh, terrible」

御婦人は 大声で 笑い出した。これでナイロビまでは 静かだろう。

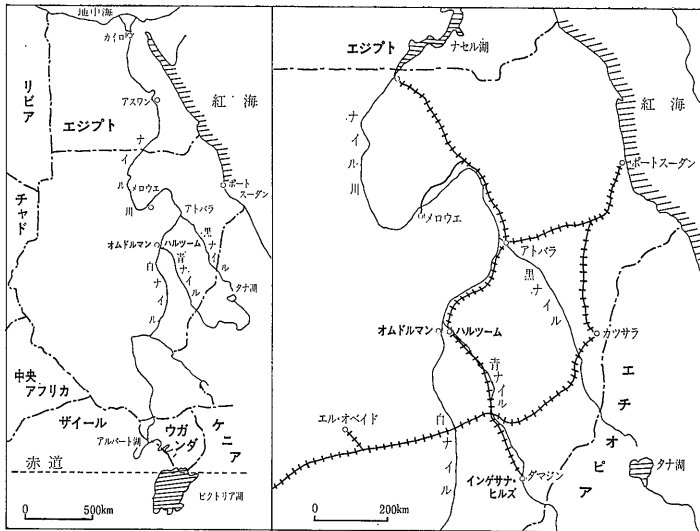
セイシェルズからナイロビまでは2時間50分の飛行である。成田空港を出発してから19時間40分 海拔1,600m



第1図 日本からの経路図

の快適な高原の都市ナイロビに到着した。日本との時差は6時間 現地時刻では午前1時15分である。不思議に疲れも睡気もない。新築後もない空港ビルは大きく 中々立派である。

空港から都心まで18kmの間には国立公園があるが 闇の中を走る車からは 猛獣が横行していることなどは判らない。今にも降ってきそうな大粒の星が埋める空の下に果しなく広がるケニアの草原では この闇の中で きっと 弱肉強食のすさまじい世界が繰り広げられているには違いないのだが 無気味なほど静かである。「太陽の町」ナイロビは 深い睡眠についている。



第2図 調査地略図

ケニアの自然美に思う

1964年に独立したケニア共和国の首都ナイロビは 東アフリカの表玄関と称されるだけあって 美しく 気候もよく 活気もある。緑に包まれた町の至る所に ブーゲンビリア ジャカランダ カンナなどの花が咲き乱れ 抜ける様に碧い空と浮雲 そして 深く明るい緑と ラテライトの鮮やかな色が調和して 素晴らしい景観を創っている。活気があるのは 恐らく 数年来のコーヒーの増産と輸出増加で 経済的に豊かになり 外国との交流がより積極的に進められているからであろう。しかし ナイロビ市内では 小さな事件が頻繁に発生しているという噂を耳にした。どの国にも些細な事件は起こりがちだが もしそれが コーヒーがもたらす富の分配に関連して発生するものであるならば 部族意識の強さとともに 気になることである。

ナイロビ滞在の短かい一時 自動車で40分ほどの所にある ナイバシヤを訪れてみた。ナイロビを発つておおよそ20分 突然 視界が開けた。深く抉れた谷はまるで絨緞を敷きつめた様に 緑一色におおわれ その谷の中には いかにも火山らしい形をした小高い山が 優美な姿態を見せている。これこそ 一目見たいと念願していた「グレート・リフト・バレー」である。

車は その谷底へ向って 下りてゆく。ゆるやかにうねる谷底には のんびりと草を食む 数頭のキリンの姿があった。しかし どうしたことか どうしても そのキリンが野生であるとは思えない。それほど人間と野生の動物とがうまく調和して共存している故か 又は 立派な舗装道路を走る自動車や観光客など この付近の動物が もうすっかり 人間と文明の利器に馴れきってしまった故か よくは判らない。



写真1 ナイロビの一角にある外国人向の住宅 深い緑の中に建つこの住宅は小人数の家庭向である

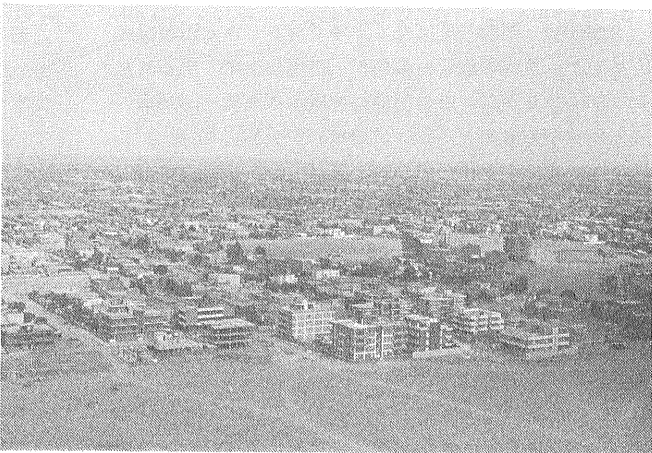


写真2 スーダンの首都 ハルツームの市街

従来 野生の動物と美しい風物とで観光とコーヒーの栽培に力を注いできたケニアでも 地下資源の開発と活用とが重要視されるようになってきた。西部のビクトリア東岸地帯は黒鉄型鉄床の賦存地帯であり グレート・リフト・バレーは地熱地帯 そして東側は主として工業原料鉄物の賦存地帯として注目されており 特に地熱地帯は 電力事情の好転をみさず 地熱発電の完成に向けて 積極的に調査・検討が進められている。美しい森と草原 輝やく陽光 槌音の高まりを 動物たちはどのような思いで見つめてゆくのだろうか。

ナイバシヤは 森と湖 洒落たコテージとレストランそして自然の静寂に包まれた美しい所である。湖に浮ぶボートは 所在なげである。野鳥が足元で遊んでいる。全く静かな中にも 心なしか 自然の語りかけが聞えてくる様な気がする。木製の椅子にもたれ 目を閉じてみると アフリカの大地に居ると言う実感はない。多くの土地で 多種多様な人達と 幾度となく接してきた故だろうか。

早朝 5時30分 空港への車は 暗闇の中を突走っていた。突然 自動小銃を持った戦闘服姿の2人の男に 停車を命ぜられた。銃口は微動もせず こちらを向いている。ナイロビ市内へ向う折にはこうしたことはなかったので 一瞬 ぎくりとしたが 空港への検門所と分り 安堵した。

空港の受付カウンターは混んではいない。荷物の重量超過に対しては がっちり 超過料金を徴収されると聞いていたが 確かに 重量計の指針を見つめむ係員の目は鋭い。待合室は 明るく 広々としていた。旅客は少なく その多くは南へ向うらしい。売店の主も張合いがないのか コーヒー専門の売店の他には 1〜2軒 店開きしているだけである。

8時20分 離陸後間もなく キリマンジャロ山の雄大な姿とケニア山の厳しい姿態が 白雲の上に 現われた。タンザニアとケニアとの国境に位置する海拔 5,895mのキリマンジャロ山と ケニアのほぼ中央部に 位置する 5,200m のケニア山の山頂は 共に 白雪に輝やいている。旅人の多くは その美しさに きっと 嘆声をあげることだろう。そして これらの山々と大地の緑と 碧空は 長い間承け継がれてきた慣習の中に生きるたくましい人々や様々の野生動物たちの純な生活態様と相俟って 規格化された居住区と生活習慣から抜け出して来た旅人に 安らぎを与えずにはおかない。しかし この美しい自然は 永久に その姿をとどめていることができるのだろうか。第4番目の氷期に当るウルム氷期

が終ってから 既に 1万年が過ぎ去った。地球科学的データは 過去の氷期は大よそ5万年 間氷期は1万年であったことを物語っている。これが今後も繰り返されるとすれば 地球は 近い将来 第5番目の氷期を迎えることになる。人間は いかにもその全知全能を傾倒したとしても 自然の力に打ち勝つことはできない。かつて繁栄を誇った巨大な動物たちは 氷期の厳しさの中に 敢えなく滅亡していった。立つたまま氷の中から発見されたマンモスの姿は悲壮である。しかし 私達は 地球上に発生する現象を 「自然がなせる業」と単純に理解してよいのだろうか。モンスーンの頃にはかなりの降雨があつた北西アフリカが早魃に見舞われ 大飢饉のために数多くの人が悲惨な日々を送らねばならなかつた事実は 私達の耳目にまだ新しい。かつて北上したサハラ砂漠は 今 じわじわと 南下しつつあるといわれている。やがて サハラ砂漠は かつての北上期に取残されたと見なされているカラハリ砂漠と 再び相見えることになるかもしれない。この北西アフリカの大早魃と対象的に 雨量の少ないことで知られてきたチュニジアやアルジェリアでは 近年 年間平均雨量の5倍以上の雨量が記録されるようになった。

この様な気候変化は 単にアフリカに限らず 汎世界的に認められつつある。

自然の偉大な力が この様な地球上の気候変化を惹起していることは確かであろうが しかし 私達は 豊さを追求めるあまり 生活圏をおびやかす自然の力とその速度を加速するような または 生活圏を安定させる自然の力に逆らうようなことを 敢えてしてはいないだろうか。化学燃料の燃焼によって発生される炭酸ガスの約50%は 空気中に残存すると見なされている。これが事実であるならば 私達の生活圏の平均気温は およそ20年後には 0.5°C上昇することになる。

科学技術は 生活とその環境保全とにどの様な係わり合いをもって これからの様に進歩してゆくのだろうか。文字通り弱肉強食のいまわしい世界が絶えず繰広げられているとはいえ 何人も この豊かな野生を否定する気にはならないだろうし むしろ その永存を願っているに違いない。自然とそこに生きる人達との調和 そして これらの人達と既に自然の多くを失いかけている人達との調和 アフリカに旅した人の多くが 再びそこを訪れる機会を得たいと願う心の奥底には 既に失われた純な世界へのノスタルジアが潜在意識としてあるに違いない。自然が その美しさを いつまでも止めているか 又は 醜い姿に変わり果てるか それは 自然に接する人の心と決して無関係ではない。

去りゆくケニアの自然美に目を奪われながら 人と自然との深い係わり合いに想を巡らせているうちに スーダンの首都ハルツーム到着のアナウンスが流れた。ケニアに比較すれば 砂漠の国ではあるが アラブ諸国の中では 緑は多い。 それにしても 「象の鼻」という意味をもつハルツームという名称が 何故 首都の名になつたのだろう。 午前9時45分 ハルツームの気温は34°C である。

青ナイルと白ナイルの接点

延長 5,760km に及ぶ大河ナイルほど 古代から現在に至るまで 榮枯盛衰の世を見つめてきた川も少ない。

日本の国土面積のおよそ8倍に相当する 300万km²といわれる面積を占める流域には ザイール ウガンダ ケニア タンザニア エチオピア スーダン エジプトの7カ国がある。 これらの国は 例外なく ナイル川にその生命を委ねているわけであるが 遠い昔 「エジプトはナイルの賜物」といったヘロドトスの慧眼と豊かな想像力には敬意を覚える。

アフリカの地図から 地中海 紅海 点在する湖 そしてナイル川とその主な支流を抜き出してみると 幾つかの興味深い事実に気がつく。 ナイル川の源流と地中海の河口とを結ぶ線は殆んど南北方向を示し この間でナイル川は著しく蛇行している。 しかし よく見るとその蛇行は 紅海にほぼ平行の流路と これと75°~80°の角度をなす流路の組合せによって構成されていることが判る。 特に ビクトリア湖~アルバート湖間 白ナイルに注ぐゾバト川 青ナイル中流以北 及び黒ナイルなどの方向性は 顕著であり いかにも 紅海の形成に関係ある地質構造に関連する地質構造とナイル川とが緊密な関係にあることを暗示する。 延々と流れるナイル川には 多くの支流が注いでいるが エジプト領内に入ると 1条の支流もない。 そこでのナイル川は まるで 息をひそめているようである。 海拔 2,400mの山地に源を発して地中海に注ぐナイル川の勾配は 一体どの程度だろう。 単純に計算すると その平均勾配はおよそ 5,000分の1となる。 一般に 鉱山で開削される坑道は 100 分の1程度の勾配ならば 水平坑道と見なされることからみれば ナイル川の勾配は驚異的とさえいえるほど緩やかである。 そして この緩やかな勾配こそが 先に挙げた国々の人々の生活を支える基盤になっているといえる。 雨に恵まれないエジプトの民が例年 6~9月に ナイル川の水嵩が増し 多量の泥土が流れてきて流域を肥沃にするのを見て 自然の力を超越した何かの存在 いわゆる神の存在を信じていたことも分る様な気がする。 恐らく 古代のエジプトやスー

ダンの民は 日頃 静止している様なナイル川の水面を見馴れていただけに ナイル川の急流はもちろん 瀑布の存在などは想像もしえなかつただろう。

青ナイルと黒ナイルがその源を発するエチオピアのアビシニア高原では 特に 6月中旬から9月中旬頃にかけて 雨が多量に降る。 そしてそれは 山岳地帯を貫流して やがて 白ナイルと合流するわけであるが この雨期を除いては 青ナイルと黒ナイルの水量は激減する。 一方 白ナイルの源流地帯の雨量は 年間を通じて 殆んど同様である。 これらのことは ナイル川の水の一定量が白ナイルによってもたらされ 先に述べた洪水の原因となる増水が アビシニア高原の降雨時期と直接に関連する青ナイルと黒ナイルの水量の極端な変化によって惹起されていることを示す。

砂漠地帯の渇水期の辛苦は想像以上である。 ハルツームの下流 250km 付近のナイル川南岸に メロウエという町がある。 殆んど雨の降らない町ではあるが 眼前にはナイル川の流れがあり 古代エチオピアの首都として栄えた頃のピラミッドが残る古都である。 この土地に生きる人々は アラブ諸国の中で いわゆるナイルの民として 水に恵まれていると見なされていることだろうし ナイルと共に生きてきたその生活様は 今も昔も余り変ってはいない。 しかし この人達が自然の厳しさにさいなまれていることも 昔から変ってはいない。 この町の年間平均雨量はわずか25mm であるが 一方 蒸発量は 2,800mm に達する。 日本では最も雨量が少ないといわれる網走でさえ 年間 870mmの雨が降る。 厳しい陽照りと容赦なく水気を奪い去る物凄い乾燥気候の中に生きる人々の辛さは この雨量と蒸発量を見ても 容易には想像できない。 かつては緑の園であつたには違いないが 何故 人はそこを捨てようとするのか。 四季に恵まれ 物に恵まれて生きる人の多くは そうした彼等の姿を見て 馬鹿げたことだと思ふかもしれない。 しかし 彼等には 彼等だけが秘めている大きな理由がある。 そしてそれは 物見遊山の通りすがりの旅人には 永久に そして 絶対に判りはしない。

近代的に装いつつあるハルツームは アラブとしてはやはり 緑に恵まれているようである。 碁盤目のように整然とした道路の両側には 並木が続いている。 34°C の暑さの中を 西へ向って 車を走らせることにした。 目的は 白ナイルと青ナイルの合流点を見ることと 歴史の町オムドルマンの見学である。 予想以上

に多い車は まるで数珠つなぎに のろのろと走っている。 視界が開け ナイル川に懸る橋に出た。 橋の中程から下流を見ると 将にそこは 白ナイルと青ナイルの接点であった。 山岳地帯を流れてきた青ナイルの水は澄み 広い砂漠を流れてきた白ナイルの水は 泥土を混えて 白濁していた。 そして両者は ナイル川の丁度真中で まるで規程を当てたように 明瞭に区別される。 この水は やがて 混り合って一つになる。 悠久の歴史を見つめてきたこの川の水は 青と白と黒のナイルの水を集めて 変らぬ潤を人々に与え続けているというのに その恩恵に浴している人々が 何故 真に打解け合おうとしないのか。 紀元前 750 年頃からスーダン北部に権勢を誇ったファラオは 僅か 100 年で 哀れな末路を迎えた。 そして今 当時の面影を残す建造物は 情容赦ない自然のなすがままに 日一日と 朽ち果ててゆく。 大いなる母ナイルと共に生きてきた民が これから先も 反目し合わなければならないとしたら悲しいことだが せめて その反目の根本的要因が 彼等自身によって作られないことを祈りたい。

ハルツームを出発してからおよそ 1 時間 オムドルマンに到着した。 ナイル川を挟んでハルツームと相對峙するこの町は スーダンの近世史に 不滅の名を残す町である。 町に入って間もなく 銀色に輝やくロケットの様な建物が見える。 一見 近代的なモスク（回教寺院）の様に見えるが 実は ムハマド・アフマド・イブン・セイド・アブドウラという勇者の墓所である。 そして その墓所の向い側には「カリフの家」と呼ばれるアフマドの遺品を納めた家が建っている。

19 世紀の始め エジプトに興ったモハメッド・アリ王朝は 富の源泉と見做されていた金と奴隷を求めて 1820 年にスーダンに侵入し 遂に エジプト南部の 1 州として これを統治するに至った。 これを契機として ナイル川沿岸のスーダン人居住区では 言語に絶する苛酷な奴隷狩りが行われ 現代スーダンの生みの苦しみが はじまったわけである。 モハメッド・アリの後継者となったケティブ・イスマイルは この奴隷狩りのいまわしさを見かねて 奴隷売買廃止の積極策を講じはしたが その努力は 容易に実を結ばなかった。 そうした頃 1882 年 自らマハデイ（救世主）と称する若いスーダン人が 突如 混迷の世に躍り出た。 この若者こそ 先の墓所に眠る勇者である。

自国の完全独立を目ざして この若者を中心に結集した人々は 聖戦の名の下に イギリス・エジプト軍に戦を挑み 連戦連勝して 急速にその勢力を増強していった。 そして 1884 年 遂に エジプト軍は潰え スーダンはエジプトの統治下を離れることに成功した。 しかし あくまでもスーダン支配を捨てきれなかったエジプトは 権謀術策に長けたイギリスのゴードン將軍を説得して ハルツームに派遣した。 だが 嵐の様なマハデイの軍勢を制圧するどころか それに抗する術もなくゴードン將軍は 1885 年 マハデイ軍の包囲網の中で戦場の露と消えた。 戦勝に湧くマハデイの軍勢 それは 将しく イスラームの始祖ムハンマドの聖戦を彷彿させるものであった。 しかし 天の試練の終末は遙かに遠く ゴードン將軍が悲壮な最後を遂げて間もなく マハデイは 突然 病死した。 享年 37 才 将来によりやく曙光を見出したばかりの若い勇者の 余りにも不本意な最後であった。

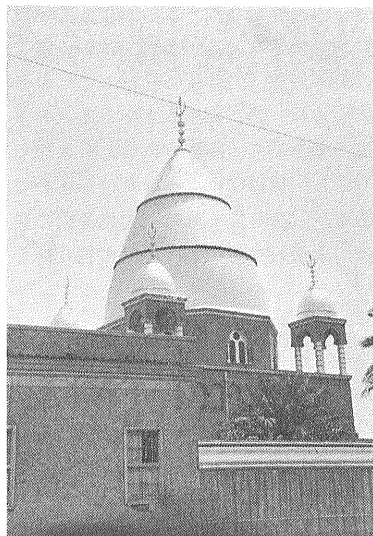


写真 3 オムドルマンにあるマハデイの墓所 銀色に輝やく近代的なモスクのように見える

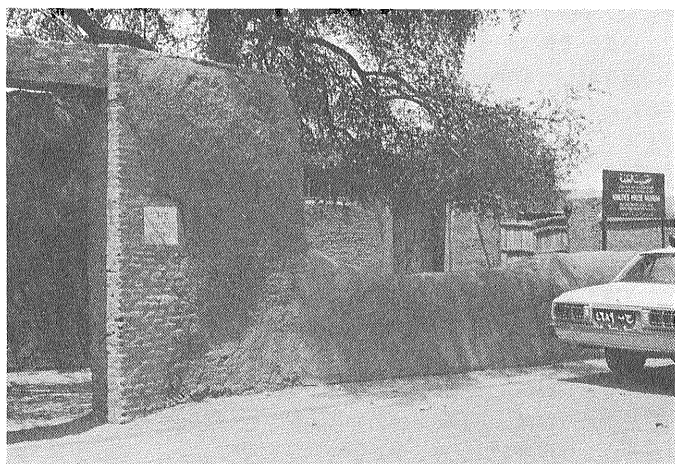


写真 4 マハデイの遺品などを納めてある「カリフの家」 オムドルマンのマハデイの墓所の向い側に建っている 当時のままの家である

栄光と傷心の歴史を秘めたオムドルマンにも やはり近代化の波は寄せている。しかし スーク(市場)には アラブの香りが強く沁み込んでいた。小さな店の入口で のんびりと 水煙草をくゆらせている老人の姿がある。そのすぐ側では 若者が紅茶をすすっている。金細工屋の主人のミザーン(秤)を見る目は まるで獲物を狙う鷹の目のようだ。狭い道をロボの曳く荷車も通ればラクダも通り 自動車も遠慮はしない。

クラクションと店員の売り声 水売りの器を鳴らす音ロボの悲しげな声 全く騒々しいことこの上なしだが 結構楽しめる光景ではある。埃っぽく しかもうるさい音の中での生活に馴れていない人は こうした光景には多少なりとも嫌悪感を抱くに違いないが しかし 馴れてくると こうした喧騒も埃りも 活力の象徴の様に思えてくるから不思議である。

弱々しく西へ急ぐ太陽には もはや 人々の意欲をそぐ力はない。ハルツームの中心街に行く人の足取りも心なしか 軽やかである。数少ないネオンが輝きはじめた。立派そうな店が並ぶ商店街から一步裏通りへ入ると どこからか 独特のアラビア音楽が聞えてきた。ウード カマンジャ カヌーン ラバープなどの弦楽器と笛のターイ そしてドラムのタブルが奏でる物悲しげな楽の音は 砂漠の果へ風に乗ってゆくようである。午後6時 西の空が青白く変りはじめた。近くにモスクがあるのだろう アーザーン(お祈りの呼びかけ)の美しい声が朗々と伝わってくる。いよいよ一日の始まりである。

インゲサナ・ヒルズ

午前5時のハルツームは 冷んやりとして 実に気持

が良い。ナイル川には 既に 小舟が棹さしている。空港へ向う車は数少ないが 朝早くから 職場へ急ぐ人はかなり居るようだ。国内線の待合室は相当に混み合っている。

予定の時刻をかなり過ぎた7時頃 ようやく チャーター機の出発準備が終った。真赤に塗られた四角な胴体の小型機は まるで 一昔前の遺物の様に思える。しかし 性能は良いらしい。

綿島の中を一直線に走る水路には ナイル川からの引水が流れている。見事に区画整理された島は美しい。ゆるやかにうねる丘陵地帯の所々で煙が上っているのは多分 野焼であろう。広々とした農耕地帯を眺めると とても砂漠の国に居るとは思えない。これも ナイル川の恵であろう。所々に 円形の柵と その中心部に建つ丸型の家が見える。山らしい山も見えず 広々とした野原と農耕地の上を飛び続けていると つい睡くなってくる。ハルツームを発ってから3時間25分 青ナイル州インゲサナ・ヒルズのククルの滑走路に到着した。まずは快適な空の旅である。しかし この滑走路は 大きな石ころだけを取除いただけの砂利道である。いかに馴れているとはいえ こんな奥地で しかも こんな砂利道がよく判るものだ。

草葺きの家が数戸づつ ぼつんぼつんと 群をなしている。島らしいものも見当たらないが この住民は どの様にして 生計を立てているのだろう。中東地域で広く見られるドムの木とアフリカの代表的なバオバブが目につく。植生が多く しかも落葉樹が多いところから察すると ここはサバンナの一部に属するのであろう。石ころだらけの道をおよそ1時間ばかり走って宿舎に到着した。朝起きてからすでに7時間を過ぎた11時である。



写真5 オムドルマンの家畜市場 ここでは羊と山羊が売買されすく近くではラクダだけが売買されている

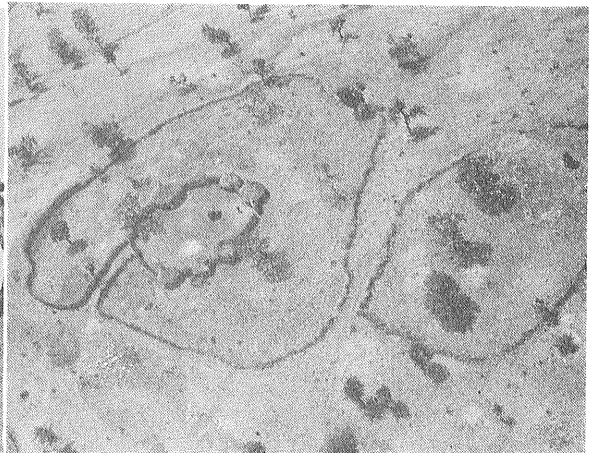


写真6 インゲサナ族の家 柵を二重に作り その中心に数軒の葺型の家が建っている

インゲサナ・ヒルズと呼ばれるこの地域が外部と接触をもつようになったのは 1965年頃である。ハム系ニグロのインゲサナ族だけが住んでいたこの地は それまで 外界との文化的接触もなく全く孤立して スーダン政府の保護地となっていた。文字のないインゲサナ語だけを話す彼等は 全くの原始的生活を送っていたらしいが 解放されてからは 最小限度の衣類を身に着けるようになったらしい。男も女も たくましい上半身をむき出しにして 滑歩している。それにしても 大した山岳地帯でもないのに 何故 インゲサナ族の外部との接触が遅かったのだろう。

クロムを生産しているジャム鉱山の部落から車で40分ほどの所に インゲサナ・ヒルズで一番大きなパウという村がある。直径15km ばかりの岩株状をなす花崗岩体の中心部に位置するこの村は 静かなたたずまいを見せている。超塩基性岩類を貫くこの花崗岩体は 著しく浸食されて 真平な低地を造り 全体的な地形は まるで 噴火口と見誤るほどである。村の中央部に 小学校と中学校があり 近くの道路には 旗を手にした生徒達が 行列している。聞けば 革命記念日のパレードが始まるころだということである。多分 ささやかな楽隊を先頭に この行列は 村をねり歩くのだろう。

教頭先生に紹介されたついでに 職員室と教室を見せてもらった。職員室には 先生が8名だということに その半数ほどの粗末な木製机があり その上には 本やノートや書類が 雑然と積重ねられている。教室内は 意外に整頓されており 木製の机と椅子は いささか窮屈そうである。黒板はなく 塗料を塗った壁が黒板代りに使用されている。見学を終えての帰路 教頭先生は 「子供達は勉強したがっているのに 学用品も教材も不足していて 思う様に教育ができません」と さみ

し気に語った。再び訪れる機会があれば 少しばかりの鉛筆だけでも届けて上げたいと思うけれども 恐らく 再びこの地を訪れる機会はあるまい。

学校に別れを告げて 先へ進むことにした。湿度が高い故か 大した暑さではないのに 汗が吹き出してくる。小高い山に登り 急斜面を降り 車で移動し 何度かこの様なことを繰返すうちに 一日の作業が終った。喉が渇くのは当然だが 多種多様な植物が繁茂しているというのに 清らかな水の流れはない。

作業を終えての帰路 かつて中国ミツションが居たという場所を訪ずれてみた。1965年から3年間このパウを根拠地として 資源探査協力を続けたという中国ミツションの規模の大きさと設備の良さには いささか羨望を覚えた。説明によれば 地質・物探関係の技術者30名 医師2名 ポーリング 機械その他の技術者68名 合計100名がここに常駐していたということである。そしてそこには 各種の車輛 ポーリング機械 各種の工作機械 岩石切断機 研磨機 分析機器 その他 多くの未使用の物品等 当時の活動を偲ばせるものが数多く残されている。実験室の一隅には電子顕微鏡やX線回析装置さえ設置されていたということであるが 人数といい仕事のための道具といい 唯々驚くばかりである。100名分の食糧を確保するだけでも大変である。留守居をしている男の話では 食糧の多くは本国から取寄せ 毎週1回は一番近いダマジンの町へ 毎月1回はハルツームへ トラックで仕入れに行っていたということである。

これだけの人数と設備 3年という期間 医療設備まで整ったこのキャンプを見ていると いわゆる技術協力の内容の差の余りの大きさに 言葉もない。パウから一山越えて宿舎へ戻る道は 晴れ晴れとした気持で今朝

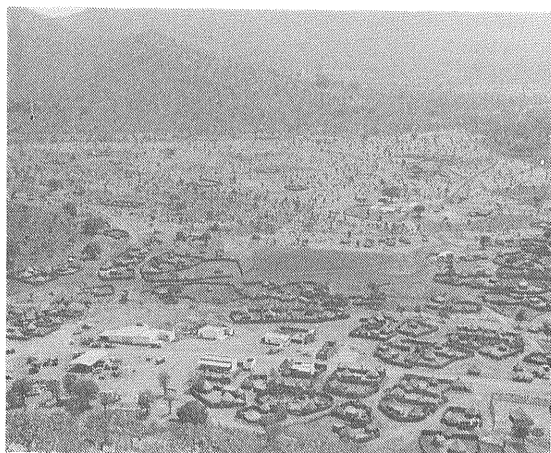


写真7 ジャム鉱山部落 6棟の白い建物の一番右にあるのは 鉱山長宅 3番目はゲストハウス その他の4棟は工作場 修理工場などである

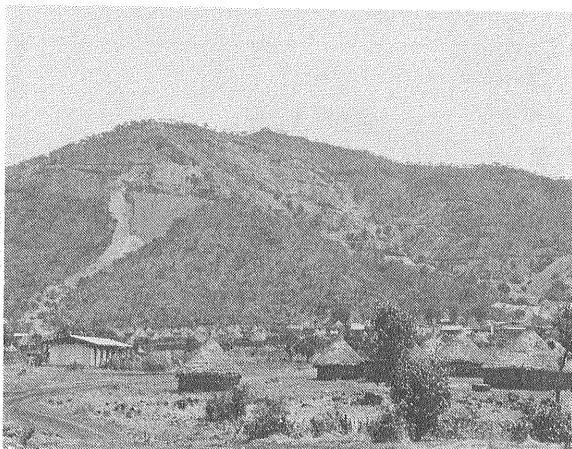


写真8 スーダン唯一のクロム鉱山であるジャム鉱山の全景と 従業員の家 鉱床のほとんどは坑内採掘され 手選の後ダマジンの貯鉱場へトラック輸送されている

通ったばかりだというのに やけに遠く感じられた。

バウの村はずれの人工池の水位は かなり下っている。乾期に入ると 急速に 水も少なくなり 日常生活にも不便を強いられていたに違いないが 1974年にこの池が建設されてからは その不安も 完全とまではいかないまでも 解消されたことだろう。しかし 年によっては この池にも水が殆んど見られないという。水を汲みに来た女性の握手する手は 全く予想外に しなやかであった。乾期の最中 池の水は何とか村人を潤ほすに足りるらしい。天秤棒を担いだ若い女性は にこやかに笑いながら わが家へ帰って行った。石ころだらけの山道を ジープは 息苦しそうに登ってゆく。

マラリアの地 ダマジン

宿舎から北東方向へおよそ80kmのダマジンへの道の大部分はコットン・ソイルにおおわれている。灰黒色のこの土壌は 雨に濡れると粘土状となって 自動車の使用を不可能にする 実に厄介な代物である。従ってインゲサナ・ヒルズ地域の野外調査の時期は 10月頃から4月頃までに限られる。

山を越え コットン・ソイルの道に入って 車は順調に走り続けた。コットン・ソイルから 急に 砂地に変った。右手に 絵になりそうな花崗岩の小高い山が一直線に点在し その山麓には まるで陽射しを避ける様に 小さな家が ぼつんぼつんと 建っている。道路傍の池は完全に乾上り 羊の群も犬も いささか疲れ果てている様である。一体この村の人達は 水の乏しいこの時期に どの様に生活しているのであろう。バオバブの木蔭に憩う村人は 見馴れぬ車が除行しても 見向きもしない。乏しい水に精気が失せているのか それとも 車などには興味がないのか 部落はあるというのに 全く音のない不気味ささえ感じられる奥地である。宿舎を出発してからおよそ3時間後にダマジンに到着した。

だだっ広い感じのダマジンの町は 青ナイル州の州都であるが 人口は1.5万人ばかりらしい。町の中心からやや離れた所に 国内線用の空港とスーダン鉄道の終着駅がある。何の変哲もない町角の店の前で 車は停った。そこは航空会社の代理店で 明日のハルツーム行の座席の確認のため 立寄ることになったらしい。昨日 電話で 予約については確認済みの筈なのに 全く手間のかかることだとは思ってはみたが 聞けば 直接にこの店へ来て確認手続をしない限り 予約取消しと見なされるそうである。これでは仕方がない。一層 汽車旅行の方が面倒でもなく 結構楽しいのではないか

と考えがちだが 40°C の暑さの中 しかも 冷房もない 汽車の旅は大変らしい。

ダマジンから程近い青ナイル川では 水力発電の工事が精力的に進められている。小じんまりとしたロセイレスというこの町は この建設工事の影響で 中々賑やかである。合計7基の発電機のうち3基が完成しており 1985年にはすべての工事が完了するらしい。工事を負請っているのはカナダということだが 日本製のタービンを使用することになっている。ダムを見学しているうちに 気温は急上昇していたらしい。工事現場の寒暖計は 正午にはまだ間があるというのに 40°Cを示していた。大した産業もなかった以前に比べればこの発電所の建設工事と完成は きっと ダマジンやロセイレスはもちろん 地域住民に大きな恩恵を与えるにちがいない。

忙ただし見学の後 どうやら町の中心地らしい場所の一角にある食堂で 昼食をとることになった。キスラ(薄いパンの上に肉や野菜をのせたもの)とナイル川の魚の唐揚げが運ばれてきた。油っ気でべとつく粗末なテーブルもうるさい蠅も 大して気にはならない。もちろんこんなことを一々気にしていたら とても アラブでは生きていけないだろう。

昼食を終えて 宿舎となる地質関係の出張所へ向った。ベッドルーム2室にシャワーとトイレがそれぞれ2箇所にあるこの事務所は 結構な広さではあるが 蚊の多いのにはいささか閉口した。マラリアの発生地として知られるダマジンの町はずれにぼつんと建つこの事務所には水があり 久しく血に飢えていたにちがいない蚊にとっては 又とない御馳走が飛び込んできたようなものだ。結局 最初で最後のダマジンの夜は 蚊との腹立たしく 絶え間ない斗争の中に 明けていった。

気温 40°C 快晴のダマジン空港には 定刻より1時間以上も早く 多勢の人が集っていた。旅客 見送り人 出迎人 誰もが清潔な身なりである。ハルツーム行は 丁度1時間遅れて 飛び発った。36人乗の機内には 18人の客が乗っている。初めて飛行機に乗ったという隣席の子供は 飛び発って間もなく 酔ったらしい。無理もない。上下左右に間断なく揺れる木の葉の様な小さな飛行機である。昼食のサンドイッチと紅茶をお代りして間もなく ハルツームに到着した。飛行時間は1時間20分 地上の気温 42°C の午後3時である。